

日本菌学会ニュースレター

Newsletter of the Mycological Society of Japan

2025-4 (9月)

目次

報告	論文執筆講座「日本新産種報告の論文化を目指して」の開催報告…山田明義	1
紹介	ABSの現場から一芽依と悠翔の実践記ー その2……………寺嶋芳江	3
書評	「まるごとわかる! 植物と菌類のサイエンス大図鑑」: 菌類の入門 に最適な魅力的な図鑑……………細矢 剛	6
学会記事	理事会報告……………	7
学会記事	会員消息……………	7



カワリサルノコシカケ (*Bondarcevomyces taxi*) 左: 傘, 右: 孔口

鮮やかな赤褐色の傘, そして傷つけるとオリーブ色ないしは褐色に変色する孔口が特徴的なきのこです。しかし, その個性が遺憾なく発揮されるのは乾燥標本にした後, 強烈な異臭を発します。例えて言うならば, 1週間放置して生乾きになった汗まみれのシャツの臭い? フィルターを掃除していないカーエアコンをつけた直後の臭い? 臭いだけで同定できる数少ないきのこの一つです。分子系統学的研究の結果, 「サルノコシカケ」と総称されるきのこ類は幾つもの目に属することがわかりました。カワリサルノコシカケは, タマチョレイタケ目やタバコウロコタケ目などに多く見られる, 典型的な「サルノコシカケ」的形状の子実体を形成しますが, イグチ目

に属する変わり種です。一方で, この種は国際自然保護連合 (IUCN) の菌類レッドリストで絶滅危惧II類 (VU) に指定されている希少種でもあり, 国内ではまだ数例しか採集記録がありません。このきのこを見つけられた際には, ご一報いただけると幸いです。なお, 異臭を発する乾燥標本を自宅で保管すると家庭内から苦情が出ること必至ですので, 標本は博物館等に寄託されることをお勧めします。

服部 力 (森林総合研究所)

論文執筆講座「日本新産種報告の論文化を目指して」の開催報告

山田 明義

(信州大学)



2025年7月5日午後、信州大学農学部ゆりの木資料館第一研修室で開催された論文執筆講座には、募集定員20名にゲスト講師や世話人等を含めて、総勢30名弱が参加しました。応募いただき参加された20名の中には7名の学生（高校生1名を含む）もあり、大変幅広い年齢構成となっていました。

薄曇りで蒸し暑い天候のもと、午後1時から始まった本講座では、日菌報の編集委員長である弘前大学の田中和明先生より最初にご挨拶いただき、先生が研究者になるまでの紆余曲折も織り交ぜながらこうしたイベントの意義について簡潔にお話しいただきました。その後私の方から今回の企画の趣旨についての事務的な説明をしたのち、講師の3名の皆さんにそれぞれご講演いただきました。



写真1 企画説明

最初に信州大学農学部の升本宙先生より、「観察記録から原稿へ」と題して、論文を書くための技術的な内容を中心に、スライドを用いて各論的に説明いただきました。随所に、先生ご自身のこれまでの投稿や審査に関する経験談が織り込まれているうえ、それぞれの内容が具体的かつ的確でコンパクトにまとめられおり、初学者にとっては正に「頼れる教科書」と言える内容だったと思います。

次に、新潟県生態研究会の丸山隆史氏より、「ただのきのこ好きだった私が日菌報デビューを果たすまで」と題して講演いただきました。地元の大学を卒業したのち

一サラリーマンとして働いていた丸山さんが、転職を契機に始めた食べるきのこ狩りが縁で柏崎きのこ研究会の布施公幹会長とつながって会員となり、自ら発見したアカダマスツポントケの貴重な成果を世に問うべく糟谷大河先生（慶應義塾大学）に連絡をとって共同研究にまで発展させた過程は、大変興味深いものでした。さらに、こうした興味を掘り下げるべく、それまでの地元に限っていた研究活動を近隣県にも拡げて新たな人脈を獲得したこと、貴重な標本を越後の夏の湿気から守る策としてアルミチャック付袋を用いるようになったこと、大枚を叩いて顕微鏡を購入したこと、サーマルサイ클ラーを個人購入するために関係者のアドバイスも参考にしながら様々な策を講じたこと、自作でトランスイルミネーターを製作したことなど、いずれも驚きの連続でした。また、こうしたことに私財や時間を全て投入するような無茶をしているわけではなく、家族との時間も大切にしながら限られた経費の中で必要な実験研究を進めているあたりも、敬服に値するものでした。そうした中で生み出されてくる緻密な論文図表を見るにつれ、丸山さんにはどれだけの熱意と力量があるのだろうか、不思議にさえ感じました。

さらに三番目の登壇となった林智絵氏（放送大学千葉学習センター）からは、「書き直してください」からはじまった論文執筆—だからこそ伝えたい、迷わず書くためのヒント」と題して、これまでのご自身の成長の歩みが赤裸々に語られていました。林さんは、放送大学千葉学習センターにて学ぶ中で2013年に鈴木彰先生（千葉大学）の講義をうけてきのこが菌類であること初めて知り、そうした驚きからきのこを調べることに目覚め、放送大学では修士課程まで進んでアミガサタケやマツカサタケの研究に邁進してきました。そしてマツカサタケの研究成果を菌学会で発表しそれを日菌報に資料として投稿するにあたり、佐藤大樹先生や根田仁先生（ともに森林総合研究所）から懇切にご指導いただいたとのことでした。最初に出来上がったマツカサタケの論文原稿は演題にもある通り、大幅な修正を求められ、何度も壁にぶち当たりながらもそれらを乗り越え、遂には投稿に至った経緯、すなわち、興味あることを何とかしたいという

林さんの熱意とその粘り強さには、感嘆しました。自分一人ではどうにもできないことはどんどん人に頼む（相談する）という林さんの姿勢も、遠くの設定目標は変えずにそれに向かって進み続ける純粋な心持ちだと感じました。投稿後にも多くの修正要求が寄せられ、結果的には当初の構想からは似ても似つかない別の内容になってしまった面はあるものの、「一番伝えなかったことを伝えることができた」ということで、また一段、研究の階段を昇ったことがよく伝わってきました。

論文執筆講座の終盤1時間半は、白熱した討論の時間となりました。講師の3名の皆さんと、田中先生と出川洋介先生（筑波大学；昨年度まで菌学会の教育・普及担当理事）に登壇いただき、急遽パネルディスカッションを実施することとしました。寝耳に水の田中先生と出川先生には大変ご苦勞をおかけしましたが、質疑に対する回答とそこから派生した議論へと飛び火し、参加者全員を巻き込んだ有機的な討論の場となりました。「論文原稿はどこから書き始めたら良いのか」という聴衆からの質問には、5名のパネリスト全員がこれまでの体験談を披露し、その具体的な理由なども述べられ、聴衆は領いたりメモをとったりと様々でした。「文献リストやそのスタイルをどうするか」という点に関する質疑では、「ChatGPTを使って直してもらう」という体験を踏まえた建設的な意見から、「そもそも投稿細則には書かれていない多数の要素があり（研究者であればある程度理解しているが初学者にはわからない）、細則を見直す必要があるのではなか」と、「そうした（明文化されていない）部分があるのでAIを使っても完全な作業に至らない」など、簡単には収束しない意見が交わされました。また、記載表現（かたちの形容表現、計測した数値の表し方から計測方法まで、など）や、記載文そのものの是非についても意見が交わされ、今日のカテゴリ論文の根幹にも関わる大変興味深い内容となりました。

時間はあっという間に過ぎて午後6時を迎え、出川先生に最後のお言葉をいただきました。当初予定されていた野外調査の予定を変更されてこのイベントに参加された経緯、学会の設立から今日に至るまでアマチュアやプロを問わず皆で菌学を目指している本学会の特性（誇るべき点）に話が及び、そしてこうした取り組みを継続していこうということで閉幕しました。

参加者の皆さんは異口同音に「参加してよかった」と話していました。「もっと真面目に淡々と進むだけの会かと思ったが、それ以上に収穫があった」、「丸山さんの話は映画にできるのではないかな」、「升本先生の説明スラ

イドが欲しい」、「林さんを見習って、やっぱりまずは書くべきだね」といった様々な感想も飛び交いました。午後7時から始まった懇親会には20名以上が参加し、賑やかな宴席となりました。中には自分の研究ノートを持ち込まれた方もおり、その内容について皆で討論を深めるなど、本当に有意義な交流の時間となりました。私自身、夜の伊那の街をあとにして自宅に戻ったのは、翌日の午前2時でした。

今回の論文執筆講座を総括すると、本企画に対する会員ニーズは高いと思われます。したがって全国を股に、「できるところで、できる時期に、できる内容と規模で」開催するという基本的なスタンスで、今後も継続的に実施いただけるとよいのではないのでしょうか。理事や幹事の先生が全国に散らばっているわけですから、「毎月1回どこかで開催する」ということも無理ではないかもしれません。もちろんこれは極端な提案ですが、こうした少人数のイベントが年に複数回があれば、全国に散らばっている会員が自宅から気軽に参加できて会員であるメリットを感じる機会にも恵まれ、かつそうした機会を通じて新たな会員を獲得することにもつながるのではないかと思います。田中先生をはじめ現理事・幹事の先生方にご尽力いただかなければ実現できないことですが、会員サービスを通じた学会の活性化の観点からは是非ともお願いしたいと思う次第です。「この会の動画を撮っておくべきだった!」というのが、唯一の後悔です。



写真2 集合写真

追記：本稿執筆に際して、田中先生、出川先生、升本先生、丸山さん、林さんに内容の確認とご協力をいただきました。

山田 明義

E-mail: akiyosh@shinshu-u.ac.jp

ABS の現場から一芽依と悠翔の実践記— その 2

寺嶋 芳江

(静岡大学 /ABS 対応サポートセンター)



【この“ものがたり”掲載の趣旨】

生物多様性条約の発効（1993 年）と名古屋議定書の発効（2017 年）を受け、海外から日本へ研究サンプルを持ち込む際に ABS の手続きが必要なことは徐々に周知されてきました。しかし、ABS 対応は国によって異なり、実際にどのような手続きをとればよいかはよくわからない状態です。そこで、実際に ABS 手続きを経て日本へ輸入した事例をもとに、ABS 手続きの流れ、国内法の遵守などへの対応を理解していただけるよう、ものがたりを作成しました。今回は、アメリカから細菌を輸入する話です。

=====



【登場人物】

真弓芽依（まゆみ めい）

国立大学の教授を退職後は、生物多様性条約と名古屋議定書に基づく ABS（アクセスと利益配分）の知識と経験を活かし、遺伝資源の輸出入に関する支援業務を行っている。

指谷悠翔（さしや ゆうと）

20 代半ば、学校の勉強には関心を持たなかったが、社会の実務や法律、経済のしくみに興味を持ち、芽依の仕事をサポートするようになって 2 年目。

=====

夏の終わりのある朝、『ABS 支援センター』では芽依が再び一通のメールに目を通していた。静かな事務所に、ノート PC のクリック音だけが響く。

「悠翔、また新しい依頼よ。今度はアメリカから細菌を輸入したいという案件」

ノート PC の前にいた悠翔が顔を上げた。

「アメリカ？あそこは生物多様性条約にも名古屋議定書にも加盟してないよね。たしか、大きな理由は、国際条約が自国の主権や知的財産権を侵害する恐れがあるということだよ」

「そう、その議論はさておいて……。だから、アメリカ由来の遺伝資源の提供国となる場合は国際的な取決めに従う必要はないの。だけど、他の国からアメリカに入ったものかどうかと、もしそうなら合法的に輸入されたかを調べる必要があるわ」

「契約は必要ないの？」

「原則としてあった方がいいのだけど、状況によるわ」

今回の相談者は、日本の国立大学に所属する研究者 B。論文を通じて知り合った現地の大学研究者から細菌を譲り受ける予定だという。

「相手の研究者に確認したけど、アメリカ産で間違いなさそうね。大学からは、PIC^{*1} や MAT^{*2}、それに MTA^{*3} の書類は不要とのこと。ただ、アメリカとのやり取りのメールはきちんと残しておくように、っていうアドバイスが遺伝学研究所^{*4} からあったわ」

悠翔は少し驚いたように言った。

「つまり、条例に基づく義務はなくても、実務的には『証拠』を残すことが重要ってことか。ABS 支援室はいつも的確な最新情報をくれるよね」

芽依はうなずいた。

「そうね、ABS は問題ないということで、今回の焦点は完全に植物防疫法対応よ」

二人は植物防疫所の「生きた昆虫・微生物などの規制に関するデータベース」で、輸入予定の細菌の学名を検索した。しかし……

「種が載っていない。つまり、規制対象かどうかの判断がまだ行われていない種ね」

「じゃあ、普通には輸入できないってこと？」

「ええ、規制有ということよ。今回は『輸入禁止品の輸

入許可申請』で進めるしかないわ」

悠翔は眉をひそめた。

「時間との勝負か・・・。B先生は急いでるのに」

「そこが勝負どころよ」

芽依は表情を引き締め、申請書作成に取りかかった。

今回は、EMSで発送することとし、『横浜植物防疫所 東京支所』を経由地として記載、未判定種名を書き入れた。

申請書には『輸送中の包装状態』『輸入後の管理方法及び場所』など14項目があり、どれも厳密に記述する必要がある。

「包装は三重構造で、散逸防止、管理施設と試験の動線、廃棄方法まで細かく書くんだよね」

「そう。図面の部屋名や実際の表示とズレがあると現地調査で指摘されるので、注意が必要よ」

そして数週間後、二人は現地調査に同席した。防疫官は施設の滅菌装置を確認し、書類上の記述と実地の一致を一点ずつ丁寧に照合した。

「輸入数量はチューブ1本でお間違いないですね」

「はい、間違いありません」

悠翔の返答に、防疫官は満足そうにうなずいた。

ほどなくして、輸入許可証票が交付された。だが、芽依の表情はまだ緩まない。

「問題はここからよ。海外の研究者が日本の検疫制度を理解するのは本当に大変なの。だから、英語でマニュアルを作成したの。検疫制度の概要、梱包手順、送付票の書き方、そして輸入許可証票の貼付位置まで全部図解入りよ」

悠翔は資料を見ながら感心した。

「これならすんなり理解してもらえるね」

それでも、送付直前にアメリカ側から再び問い合わせがあった。

「本当にこの送り方で正しいのか」など、細かな確認が続く。

「輸入の条件に違反したら問題だわ・・・。それだけは避けないと」

芽依の声には緊張が滲んでいた。

「受け取ったB先生から連絡。無事到着だ」

発送から11日後、ついに荷物が日本に届いた。外装

は発泡スチロール箱、内部は三重包装。サンプルはチャック付きビニール袋に収められていたとのこと。

芽依は深く息をついた。「よかった・・・ほんとうに」

数日後、研究者Bから丁寧なお礼のメールが届いた。

「植物防疫制度に関して、これほど丁寧なサポートを受けたのは初めてです。本当にありがとうございました」

「B先生はこれからも気を抜けないね。輸入条件による厳重な管理が必要だ」

「そうね。日本の農業守るためにね」

悠翔が次のメールを開きながら言った。

「さて・・・、次は◇◇◇国からの□□□の件だつてさ。今度も山あり谷ありになりそうだよ」

芽依は小さく笑い、ファイルを手に取った。

静かだが確かな実践の日々は、今日もまた新しい案件へと歩み出す。

*1 PIC (Prior Informed Consent) : 情報に基づく提供国の事前の同意

*2 MAT (Mutually Agreed Terms) : 提供国と利用国が相互に合意する条件

*3 MTA (Material Transfer Agreement) : 材料移転契約

*4 国立遺伝学研究所 ABS 支援室

<https://idenshigen.jp/>

=====

より詳細な情報については、こちらをご覧ください。

<https://terayoshi-gyosei.com/download/absreport6.pdf>

皆様のご質問、ご感想、ご意見などをお寄せください。

E-mail: terashima.yoshie@shizuoka.ac.jp

(寺嶋芳江)

=====

【芽依から皆様へお詫びと訂正】

日本菌学会 NL 2025 年 7 月号の記事でわたくしの言葉に誤解を生むような表現があったことをお詫びいたします。

まず一つ目は、『土壌は輸入禁止品に指定されていて、乾燥していても基本的に輸入は不可。でも、120℃以上の高圧滅菌か 500℃の乾熱処理をしたものなら、許可されるのだけど』という発言についてです。現地で滅菌処理などを行えば、輸入禁止品の輸入許可の手続きをしなくとも輸入が可能になるわけではありません。ただし、許可手続きを踏んで、日本へ輸入する際に植物防疫官立

会のもとで高圧殺菌（120℃）を行った場合は、制度上での管理は完了となります。また、500℃の乾熱処理については、許可手続きにより輸入された土壌の利用中や利用後の処理方法ですので、この場合には該当しません。

二つ目は、『「よし、外注先のシーケンス会社が検査済施設か確認してみる。」悠翔が調査した結果、その会社はすでに植物防疫所に登録済みの施設であることが確認された。』という表現です。実際には、輸入禁止品の移動には許可が必要です。輸入禁止品を使った研究をするために、特殊な施設が必要であり、その施設の承諾を得た場合は、輸入許可条件の一部変更（管理施設及び管理施設の追加）手続きを行います。また、安易に『登録済み』という表現を使ってしまいましたが、輸入禁止品を管理する施設を登録するという登録制度はございません。

最後に、この“ものがたり”では、輸入禁止品が研究室に届くまでを記述していますが、その後も、研究者の方は許可条件による厳重な管理が必要です。

今後はより正確な言葉遣いを心がけます。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。



E-mail: terashima.yoshie@shizuoka.ac.jp（寺嶋芳江）

「まるごとわかる！植物と菌類のサイエンス大図鑑」：菌類の入門

に最適な魅力的な図鑑

編：DK 社，訳：清水晶子

河出書房新社，2025 年 6 月 24 日

208 pp. 3,980 円 + 税

ISBN : 978-4-309-25474-6



現在東京大学農学部で標本整理のボランティアをされている根田先生から「植物と菌類について、いい本があるよ」と紹介を受けたのがこの本との出会いである。この本はイギリスの DK 社から発行されたものである。DK 社は自然から歴史，産業に至る様々な分野で優良な図鑑を多数出版しており，これらは世界中の言語に翻訳されている。いずれも美しい写真やイラストをふんだんに使い，事象をグラフィカルに解説したもので，かなり専門的な説明まで入っており，初学者が科学の諸分野の概略を知るにはとてもよい入門書となっている。本書は，タイトルの通り，植物と菌類の両方を網羅し，成長，生殖，生態，人間とのつながりなど，様々な側面から植物・菌類を紹介するものである。約 200 ページのうち，菌類は約 50 ページを占めており，菌類の系統学的位置，多様性，

菌糸や子実体の構造，成長のしくみ，様々な生物との相互関係や寄生・共生などの生態，代謝物などの利用などの応用分野などを要領よくコンパクトにまとめて紹介している。例えば，成長の項目では，土の上に落ちたどんぐりの中に広がる菌糸のイメージを見開きで大きく示しながら，一方で菌糸の先端構造（先端小胞の存在やミトコンドリアの偏在による成長ゾーン，その後の貯蔵ゾーンなどの存在がイラストで紹介されている），もう一方で，菌糸の束による栄養の移送のメカニズムがイラストで示されている。カビやきのこの子実体も美しいイラストで解剖的に示されており，ページをめくるのが楽しい。そしてこの 50 ページで，胞子の散布，菌根による地下のネットワーク，シロアリの卵の擬態，線虫捕食菌の捕食機構，糞生菌，マイコパラサイト，植物病原菌，カエルツボカビやコウモリ白鼻病など，かなりマニアックで今日的な内容までが網羅されている。これらは，筆者も大学の初学者向けの授業で扱うトピックであり，このコンパクトさとビジュアルを揃えた構成には唸られる。値段もお手頃（税込み 4,378 円）である。翻訳は東大特任研究員の清水晶子氏である。索引や用語集も充実しており，各種の重要な用語は英語も表記されている。若干，もとの出版国であるイギリスの英語表現に偏らざるを得ない部分があるが，これは翻訳の宿命であろう。また，植物の部分も同様にすばらしく，藻類から維管束植物まで幅広く網羅している。まさに初学者が手にとってほしい本である。

細矢 剛（国立科学博物館・植物研究部）

Email: hosoya@kahaku.go.jp

7 ページは『会員限定記事（印刷版限定）』

日本菌学会ニュースレター 2025-4 (9月)

日本菌学会ニュースレターは年4号発行され、学会会員と賛助会員まで送付されます。発行部数は1,300部です。また、常時投稿記事を募集しております。ご意見、ご不明の点などございましたら下記の編集委員までご連絡下さい。

日本菌学会ニュースレター編集委員長(2023-2024年度)
小泉敬彦 東京農業大学
tk208124@nodai.ac.jp

同編集委員

岩間杏美 菌類懇話会

anzutake85@gmail.com

服部友香子 森林総合研究所

hattori_yukako030@ffpri.go.jp

蓑島綾華 神奈川県農業技術センター

ayakaminoshima45@gmail.com

森谷千星 製品評価技術基盤機構

moriya-chise@nite.go.jp

吉田裕史 奈良先端科学技術大学院大学

yoshida.hiroshi@naist.ac.jp

一般社団法人日本菌学会会長(2025-2026年度)

玉井 裕(北海道大学)

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

副会長

服部 力(森林総合研究所)

理事

保坂健太郎(庶務担当;国立科学博物館)

矢島由佳(庶務担当;室蘭工業大学)

清水公徳(編集委員長;東京理科大学)

田中和明(日本菌学会会報編集責任者;弘前大学)

星野 保(国内集会・教育・企画担当;八戸工業大学)

白水 貴(広報・普及[HP]担当;三重大学)

深澤 遊(国際集会担当;東北大学)

糟谷大河(会計担当;慶應義塾大学)

日本菌学会ホームページ

<http://www.mycology-jp.org/>

速報性の必要なイベント情報の掲載などは学会ホームページ担当(secretary-general@mycology-jp.org)までお問い合わせ下さい。その他、学会運営等に関しては、上記まで適宜お問い合わせ下さい。

日本菌学会では、随時、会員を募集しております。広い意味での菌類(地衣、粘菌なども含む)に興味をお持ちの研究者ならびに愛好家の方など、どなたでもご入会いただけます。学会への入会方法は、ホームページをご覧ください。また、賛助会員についても募集しております。

編集後記

7月に屋久島調査に行ってきました。本調査は所属研究室で継続して実施しており、私自身は今回で5回目の参加となりました。前回2月の調査時は、九州で記録的な大雪となったタイミングと重なってしまい、滞在期間中は暴風が吹き荒れ雪や雹が降り、林道は積雪によって封鎖されてしまい、山へはほとんど登れませんでした。屋久島の南部にはささやかなメヒルギの自生地がありますが、雪降るマングローブという珍しい光景を見ることができたのは唯一良かったことかもしれません。そんなこんなで今度こそはと意気込んで入島し、低標高地から高標高地までぐりと回ってサンプリングを行いました。今回の調査には昆虫研究者が3名同行していたこともあり、普段あまり気に留めていなかったカミキリムシやハチの仲間なども観察することができました。厳しい暑さと日差しにやられながらも、各自が目的とする菌類を採取し充実した調査ができたのですが、なんと帰る間際に帰路便が新燃岳の噴火の影響で欠航になるという思わぬトラブルに遭遇しました。伊丹経由便に変更し無事に帰ることができましたが、フィールド調査中の自然災害リスクとその備えの重要性を考えさせられました。

(編集委員 服部友香子)

菌類が栄養菌糸体として生育する際、菌糸の先端では細胞膜を拡張し続けながら、同時に菌糸外に向けて多種多様のタンパク質を分泌し続けています。実験室で培養している菌の遺伝子発現様式を調べてみると、発現量がとりわけ高水準な遺伝子群を分泌タンパク質の遺伝子群が占めていたりします。タンパク質を体外に放出することはその分コストがかかる訳ですが、それでもなお種々のタンパク質を分泌し続けて生育するのですから、それだけ栄養菌糸体にとって分泌は重要なことなのでしょう。分泌物の内容は生育時期に応じて様々に変化し、(広く実際に調べたことはありませんが)おそらく種によっても様々に異なります。分泌は目に見えるものではありませんが、「何を分泌するか」が栄養菌糸体の生き様そのものであるといっても良いかもしれません。分泌タンパク質の中にはその作用がまったく不明である(機能が知られたタンパク質との類縁関係が見出されない)ものも多く、そこに菌類の奥ゆかしい未知の領域が広がっていると感じます。それをどうにかして解明していくのが私のライフワークの一つです。編集委員2期目を務めております吉田です。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

(編集委員 吉田裕史)

Volume 66, Issue 4 (2025)

Available online at: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/mycosci/-char/ja>

Contents

- | | | | |
|-----------|---|---|---------|
| SC | <i>Endogonales</i> fungi associated with understory herbaceous plants in Japanese temperate forests | Ryota Kusakabe, Moe Sasuga, Masahide Yamato | 201–205 |
| FP | Anamorph diversity and species differentiation with shifting of life cycle types in <i>Corollospora</i> , a genus of marine ascomycetes; with an emendation of teleomorph of <i>Varicosporina prolifera</i> and a description of a new anamorphic species | Akira Nakagiri, Koji Miyazaki, Ryotaro Shino | 206–221 |
| FP | Powdery mildews on <i>Fragaria</i> spp. and <i>Rubus</i> spp. - unravelling the phylogeny and taxonomy of economically relevant species within the intricate <i>Podosphaera aphanis</i> s. lat. complex | Michael Bradshaw, Miao Liu, Uma Crouch, Jacklyn Thomas, Parivash Shoukouhi, Dan-Ni Jin, Shu-Yan Liu, Andrew Paul, Uwe Braun | 222–231 |
| FP | Homeobox transcription factor BmHox7 is required for sexual reproduction, but not for appressorial development and pathogenicity in <i>Bipolaris maydis</i> | Seika Koya, Sae Shigeyoshi, Takuya Sumita, Toshikazu Irie, Kazumi Suzuki, Kosuke Izumitsu | 232–239 |
| FP | Dual regulation of appressorium development in the maize pathogen <i>Bipolaris maydis</i> : BmOPY2-mediated hydrophobic surface recognition and pectin recognition | Hiroki Yoshida, Sae Shigeyoshi, Syunsuke Goto, Masashi Sassa, Kenya Tsuji, Akira Yoshimi, Chihiro Tanaka, Takuya Sumita, Toshikazu Irie, Kazumi Suzuki, Kosuke Izumitsu | 240–248 |

RV Review

FP Full Paper

SC Short Communication

N Note

日本菌学会賛助会員

(株) 秋山種菌研究所

〒 400-0042 甲府市高畑 1-5-13
Tel 055-226-2331 Fax 055-226-2332

(株) キノックス

〒 989-3126 仙台市青葉区落合 1-13-33
Tel 022-392-2551 Fax 022-392-2556

(株) 千曲化成

〒 389-0802 千曲市内川 1101
Tel 026-276-3355 Fax 026-276-6182

TK 製薬 (株)

〒 337-0024 埼玉県さいたま市見沼区片柳 412-1
Tel 048-686-1828

(一財) 日本きのこ研究所

〒 376-0051 桐生市平井町 8-1
Tel 0277-22-8165 Fax 0277-46-0906

(株) 富士種菌

〒 400-0226 南アルプス市有野 499-1
Tel 055-285-3111 Fax 055-285-3114

ホクト (株)

〒 381-0008 長野市大字下駒沢 800-8
Tel 026-296-3211 Fax 026-296-1465

(株) 北研

〒 321-0222 栃木県下都賀郡壬生町駅東町 7-3
Tel 0282-82-1100 Fax 0282-82-1119

三菱ケミカル (株)

〒 227-8502 横浜市青葉区鴨志田町 1000
Tel 045-963-3601 Fax 045-963-3976

森産業 (株) 研究開発部

〒 376-0051 桐生市平井町 8-1
Tel 0277-22-8168 Fax 0277-40-1557

ユキグニファクトリー (株) 研究開発室

〒 949-6695 南魚沼市余川 89
Tel 025-778-0153 Fax 025-778-1282

(2025 年 8 月現在)

前号のニューズレターにおいて、「ユキグニファクトリー (株) 研究開発室」の社名を旧名称のまま掲載しておりました。関係各位および当該企業の皆様にご迷惑をおかけしましたことを、ここに深くお詫び申し上げます。

投 稿 案 内 (令和 3 年 4 月 1 日改訂)

日本菌学会ニュースレターは、会員への様々な情報提供と会員相互の交流を図ることを目的に、年 4 回（1 月、3 月、7 月、9 月）発行されます。学会運営サイドからの報告や最新情報のアナウンスとともに、会員からの投稿による菌類全般に関する資料、研究レポート、報告、紹介、随想、解説、表紙写真（線画・イラストを含む）などを掲載します。投稿にあたっては、次のことを遵守してご執筆下さい。

1. 原稿はワープロソフト（MS Word、テキストエディタなど）を用い、A4 版用紙を縦長に、上下左右を 2.0 cm 以上空けて、横書きで作成して下さい。図表・写真についても、可能な限り別の電子ファイル（EPS, TIFF, JPEG, BMP などの画像ファイル、あるいは Adobe Photoshop (PSD), Illustrator (AI)）をご用意下さい。
2. 原稿は、電子メールの添付ファイルにてお送り下さい。投稿に際しては、必要事項を記入した著作権譲渡書および投稿票を添付して下さい。電子メール投稿時の標題は、NL-####（#### は投稿者の姓のローマ字表記；山田なら NL-Yamada）として下さい。電子ファイルが比較的大容量の場合には、送付方法について予めご相談下さい。投稿料は不要です。
3. 原稿作成にあたっての注意点：できるだけ簡潔な文章で作成して下さい。口語的な表現、難しい言い回しや一般的でない漢字、特殊な専門用語は避けて下さい。**アラビア数字および英字は半角**に統一してください。**句点は全角ピリオド「.」、読点は全角カンマ「,」、日本語の文中での括弧は全角「()」で入力**して下さい。いずれの原稿も、体裁や文体の変更、内容の修正、投稿雑誌の変更などについて、編集委員会から指示がなされる場合があります。
4. 資料・研究レポートは原則として刷り上がり 5 頁（原稿ベースで 10 枚程度）以内、紹介・随想・解説は刷り上がり 3 頁（原稿ベースで 6 枚程度）以内とします。超過頁の可能性がある場合には、予め編集委員長までお問い合わせ下さい。
5. 図表（写真を含む）は白黒で印刷されますが、ホームページ掲載分（PDF 版）はカラー対応が可能です。写真の場合には、できるだけカラー版をご用意下さい。図表の枚数は特に制限しませんが、本文と図表を合わせて制限頁内に収まるようご調整下さい。原稿の右欄外に、図表の挿入位置を示して下さい。また、誌面の都合ですべての図表を掲載できない場合があります。
6. 資料・研究レポートは幾つかの節に分け、太字の小見出しをつけて下さい。菌のリストを含む原稿の場合、原稿に使用した標本は博物館等に寄託して下さい。また根拠にした図鑑名を示して下さい。引用文献は最小限に留め、例に従って記述して下さい。
7. 和名は学会推奨和名を使用してください。また、新和名を提唱する場合は、データベース委員会の提言・勧告（日菌報 49:99-101, 2008）を参照して下さい。

8. 編集委員会による編集・校正後、著者校正をお願いします。受け取り後、48 時間以内に校正しご返送下さい。別刷りは原則的に受け付けておりませんが、ご希望の方は編集委員までお問い合わせ下さい。

9. 支部、談話会、同好会などの会合、研修会、観察会の開催予定、各地の博物館などで開催される展示会などの情報も随時受け付けます。ただし、各号発行日の 1 ヶ月前までに到着するようご注意ください。

10. 掲載された資料、研究レポート、報告、紹介、随想、解説、表紙写真、その他の著作権は、オンライン配布を含み、本学会に所属します。

11. 記事は原則として、クリエイティブ・コモンズ表示・非営利（CC BY-NC 4.0）の条件下で掲載されます。ただし、著者全員の合意があれば、表示・非営利・改変禁止（CC BY-NC-ND 4.0）も選択できます。

12. 引用文献の表記等その他詳細は、日本菌学会会報の投稿規定、投稿細則に準じます。

引用文献の表記例（ローマ字アルファベット順）

i. 雑誌

Hyde KD, Chalermpongse A, Boonthavikoon T (1990) Ecology of intertidal fungi at Ranong mangrove, Thailand. *Trans Mycol Soc Jpn* 31:17-27

池ヶ谷のり子・後藤正夫 (1988) シイタケ菌の子実体形成に及ぼすフェノール物質の硬化. *日菌報* 29:401-411

ii. 単行本

全体引用：

Domsch KH, Gams W, Anderson T-H (1980) *Compendium of soil fungi*, vol 1. Academic, London

原田幸雄 (1993) キノコとカビの生物学. 中央公論社, 東京

部分引用：

Cooke RC, Rayner ADM (1984) *Ecology of saprotrophic fungi*. Longman, London, pp 305-320

渡邊恒雄 (1993) 土壤糸状菌. ソフトサイエンス社, 東京, pp 82-109

章の引用：

Sagara N (1992) Experimental disturbances and epigeous fungi. In: Carroll GC, Wicklow DT (eds) *The fungal community*, 2nd edn. Marcel Dekker, New York, pp 427-454

徳増征二 (1983) 落葉生菌類. 菌類研究法 (青島清雄ら編). 共立出版, 東京, pp 107-116

iii. 国際学会の要旨集あるいはプロシーディングス

Kirkpatrick B, Smart C (1994) Identification of MLO-specific PCR primers obtained from 16S/23S rRNA spacer sequences. 10th International Congress of the

原稿の送付先

日本菌学会ニュースレター編集委員長 小泉敬彦
〒156-8502 東京都世田谷区桜丘 1-1-1
東京農業大学生命科学部
Tel: 03-5477-3191
E-mail: tk208124@nodai.ac.jp